或問　WAKUMON　1
No.31,（2017）pp.1-14

江戸時代唐船齎來の『唐詩選』とその再版本

松浦　章*

要旨：明代後期由李攀龍所編纂的《唐詩選》總計收錄了唐詩 465 首。其中五言古詩 14 首、七言古詩 32 首、五言律詩 67 首、五言排律 40 首、七言律詩 73 首、五言絶句 74 首、七言絶句 165 首。《唐詩選》曾經在唐詩較為盛行的日本江戸時代備受矚目，流傳甚廣。然而，江戸時代傳入日本的原版《唐詩選》由於入手比較困難，因此在日本曾被製作成多個版本。其中尤其以江戸的出版商小林新兵衛所經營的商號嵩山房所出版之《唐詩選》為最多。但其具體實情如何在目前的相關研究中尚未得到明確的解答。

本次論文將對日本寛延二年（1749）出版的以崇禎元年（寛永五、1628）的《唐詩選》為基礎而作成的和刻本以及其在寶歷至寛政年間的出版情況進行論述。

關鍵詞：唐詩選　江戸時代　和刻本　小林新兵衛

1　緒言

『唐詩選』全七巻は、明代の山東歴城（現：山東省濟南市）の李攀龍（1514-1570 年）が、唐代の名詩を選び編集した詩集と言われ、唐詩の正統的な拡張や声律を伝えている詩集として多くの人々から評価を受けてきた。[1]しかし李攀龍の編集では無く、永瑢『四庫全書總目』巻一百八十九、集部四十二、「古今詩删三十四卷、江蘇巡撫採進本」に、「流俗所行、別有攀龍唐詩選、攀龍實無是書、乃明末坊賈、割取詩删中唐詩、加以評註、別立斯名以其流傳既久。今亦別存其目、而不錄其書焉」[2]とあるように、「李攀龍が歴代の詩を選び、王世貞が続補して作った『古今詩删』の中から、唐の部分を抄録したものを、ある本屋が出版したとしている」とされている。[3]

永瑢編『四庫全書總目』巻一百九十二、集部四十五にもその経緯が見られる。

唐詩選七卷、内府藏本

舊本題明李攀龍編、唐汝詢註、蔣一葵直解、攀龍有詩學事類汝詢有編蓬集一葵有堯山堂外紀、皆已著錄攀龍所選、歴代之詩本名詩删、此乃摘其所選唐詩汝詢、亦有唐詩解此、乃割

---

* 松浦章（MATSUURA, Akira 1947-）関西大学名誉教授、関西大学東西学術研究所客員研究員。

1 花房英樹「唐詩選」、『アジア歴史事典』第 7 巻（全 12 巻）、平凡社、1961 年 5 月、54 頁。

2 永瑢『四庫全書總目』巻一百八十九集部四十二

3 川口久雄「唐詩選」、国史大辞典編集委員会編『國史大辭典』第 10 巻、吉川弘文館、1989 年 9 月、97 頁。

取其註、皆坊賈所為疑、蔣一葵之直解、亦託名矣。然至今盛行鄉塾間、亦可異也[4]

とされるように、明の李攀龍が唐代の詩を収集に関与していたことは確かなようである。唐代の詩人の詩を明代において編集収録された出版されたものであった。また日本でも「この書がわが国に伝わって高い評価をうけたのは、江戸時代の中期、正徳の初めのころから天明の末に至る約八十年間である」[5]と指摘されたが、この『唐詩選』がどのように、日本へもたらされ、流布していったかの経過は明かではない。また中国でも『唐詩選』に関する成果として、金生奎『明代唐詩選本研究』、賀厳『清代唐詩選本研究』[6]などが上梓されているが、いずれも中国国内の問題を考究したものであって、『唐詩選』が海外にどのように影響を与えたかについては触れられていない。

そこで、『唐詩選』が江戸時代の日本でどのように流行したかについて述べてみたい。

２　中国の『唐詩選』の日本への齎來

江戸時代の日本に『唐詩選』が、何時に唐船によって齎來されたかの記録は、大庭脩氏の『江戸時代における唐船持渡書の研究』[7]が重要な資料を提供してくれている。

享保二十年（雍正 13、1735）十一月に長崎に来航した二十五番広東船の船主黄瑞周、楊叔祖、財副翁肇穀の船が中国から日本へ積載してきた時の齎來書目が残されている。[8]この船は、『五車韻瑞』二部をはじめとして『世説補』一部[9]まで 100 種に及ぶ書籍を舶載してきた。その中に、『唐詩選』一部[10]が含まれていた。

さらに「宝暦四年舶來書籍大意書戊番外船」に、『唐詩選』の舶載が見える。宝暦四年は甲戌年（乾隆十九、1754）であり、長崎来航の唐船の規定数外の船であったため戊年の番外船とされた。その貿易船である戊番外船が長崎に来航し、中国から齎來し荷揚げされた長崎で、積荷の書籍が精査された際の記録が残されている。その記録に次のようにある。

一　唐詩選　壹部壹套四本　但脱紙無シ

---

[4] 永瑢『四庫全書總目』卷一百九十二集部四十五

[5] 川口久雄「唐詩選」、国史大辞典編集委員会編『國史大辭典』第 10 巻、吉川弘文館、1989 年 9 月、97 頁。

[6] 金生奎『明代唐詩選本研究』合肥工業大学出版社、2007 年 7 月。賀厳『清代唐詩選本研究』人民出版社、2007 年 3 月。

[7] 大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』関西大学出版部、1967 年 3 月第一刷、1981 年 3 月第二刷（739、索引 60、10 頁）。

[8] 「享保二十年二十五番廣東船齎來書目」、大庭脩編『江戸時代における唐船持渡書の研究』関西大学東西学術研究所、1967 年 3 月、246 頁。

[9]「享保二十年二十五番廣東船齎來書目」、大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』245-246 頁。

[10] 同上、246 頁。

右ハ明ノ李攀龍カ編選ニテ諸體ノ詩四百六十首ヲ選シテ、諸家ノ定評ヲ附シ、或ハ其綱領ヲ槩擧シ、或ハ其奥妙ヲ上截ニ録シテ、七巻トシ、巻首ニ統論二章、雑論八十餘則ヲ載セ申候フ。崇禎元年ノ刊ニテ御座候。[11]

とある。この「大意書」によると、『唐詩選』は明代の李攀龍が編集して、460 首を選択しそれを掲載したものであり、それぞれの詩に関する諸家のさまざまな批評などを、上部に記載した形式の書物であったことが知られる。このもたらされた『唐詩選』は崇禎元年（寛永五、1628）に出版されたものであった。

日本に輸入されたことが確認できる『唐詩選』は、これら 2 部である。

享保二十年（1735）十一月　二十番廣東船

宝暦四年（1754）　　戌番外船

日本のもたらされた『唐詩選』が日本でどのように流布したのであろうか。現在の状況を全国漢籍データベース協議会の全国漢籍データベースで検索して、『唐詩選』七巻本で江戸時代に模刻等により出版の明確なものに限定して次に一覧表に掲げてみると、全部で 90 点近くを数える。

表 1　日本研究機関等所蔵『唐詩選』の状況一覧

書名　巻数　撰者名	校訂者名/ 刊行年/形状等	所蔵機関
唐詩選七卷	服部元喬 校 寛政五年 刊巾箱本	蓬左文庫
唐詩選七卷 明李攀龍 撰	弘化二年 嵩山房刊 紀府高市氏 重印巾箱本	新潟大
唐詩選七卷 明李攀龍 撰	服部元喬 校 文化四年 江戸嵩山房小林新兵衞刊本	新潟大
唐詩選七卷 明李攀龍 撰	服部元喬 校 文政元年 江戸嵩山房小林新兵衞刊本	新潟大
唐詩選七卷 明李攀龍 撰	服部南郭 考訂 嘉永七年 江戸小林新兵衞 刊本	九大 六本松
唐詩選七卷 明李攀龍 撰	服部元喬 校 文化四年刊 江戸嵩山房小林新兵衞等	宮城教育大学
唐詩選七卷 明 李攀龍 撰	服部元喬（南郭） 校 享保九年刊 嵩山房	山梨県図
唐詩選七卷 明 李攀龍 撰	服部元喬（南郭） 校 寛政四年刊 江戸嵩山房小林新兵衞	山梨県図
唐詩選七卷 明 李攀龍 撰	服部南郭 考訂 享和二年 江戸小林新兵衞 刊	国会
唐詩選七卷 明 李攀龍 撰	服部南郭 考訂 天保二年 江戸小林新兵衞 刊	国会
唐詩選七卷 明 李攀龍 撰	服部南郭 考訂 安政四年 大阪吉文字屋市兵衞江戸小林新兵衞刊	国会

[11] 同上、324 頁。

唐詩選七卷 明 李攀龍 撰	服部南郭 考訂 慶應三年 小林新兵衞 再刻	国会
唐詩選七卷 明 李攀龍 撰	服部南郭 考訂 文政元年 江戸小林新兵衞 重刊	国会
唐詩選七卷 明 李攀龍 撰	服部南郭 考訂 萬延二年 江戸小林新兵衞 再刻	国会
唐詩選七卷 明 李攀龍 編	天保三年 江戸小林新兵衞	東北大
唐詩選七卷 明 李攀龍 編	天明四年 嵩山房 刊	佐賀県図
唐詩選七卷 明 李攀龍 編	寛政八年 江戸嵩山房小林新右衞門 刊本	名大
唐詩選七卷 明 李攀龍 編	服部元喬 校 天保六年 江戸小林新兵衞等 再刊本	大阪府立中之島
唐詩選七卷 明 李攀龍 編	服部元喬 校 天明七年 江戸小林新兵衞等 刊本	大阪府立中之島
唐詩選七卷 明 李攀龍 編	服部元喬 校 寛政四年 刊本	蓬左文庫
唐詩選七卷 明 李攀龍 編	服部元喬 校 文化十一年 江戸小林新兵衞 重刊本	大阪府立中之島
唐詩選七卷 明 李攀龍 編	服部元喬 校 文政十三年 嵩山房小林新兵衞 重刊本	名大
唐詩選七卷 明 李攀龍 編	服部元喬 考訂 寛政五年 江戸小林新兵衞	東北大
唐詩選七卷 明 李攀龍 編	明和四年 刊 平仄假名附本 後印	東京都立中央
唐詩選七卷 明 李攀龍 編	服〔部〕元喬 校 慶應三年 刊 明治 印	東京都立中央
唐詩選七卷 明 李攀龍 編	服〔部〕元喬 校 文政十三年 刊	東京都立中央
唐詩選七卷 明 李攀龍 編	服部元喬 校 寛政四年 刊	酒田市立
唐詩選七卷 明 李攀龍 編	服部元喬 校 文化十年 刊	静嘉堂文庫
唐詩選七卷 明 李攀龍 編	服部元喬 校 文化十年 刊	静嘉堂文庫
唐詩選七卷 明 李攀龍 編	服部元喬 校 文化四年 刊	酒田市立
唐詩選七卷 明 李攀龍 編	服部元喬〔南郭〕 校 享保九年原刊 嘉永七年六刻	館林市立
唐詩選七卷 明 李攀龍 編	服部元喬〔南郭〕 校 享保九年原刊 天保十四年五刻	館林市立
唐詩選七卷 明 李攀龍 編	服部元喬〔南郭〕 校 享保九年原刊 文政十三年四刻	館林市立
唐詩選七卷 明 李攀龍 編	服部元喬〔南郭〕 校 享保九年原刊 明和四年再刻 文化十年 小林新兵衛三刻	館林市立
唐詩選七卷 明 李攀龍 編	服部元喬〔南郭〕 校 享保九年原刊 萬延二年	館林市立
唐詩選七卷 明 李攀龍 編	服部元喬（南郭） 校 明和七年 刊	酒田市立
唐詩選七卷 明 李攀龍編	服部元喬 考訂 文政元年刊	佐野市立郷土

		博物館
唐詩選七卷 明李攀龍編選	服部元喬 考訂 萬延元年刊	佐野市立郷土博物館
唐詩選七卷 明 李攀龍編	服〔部〕元喬（南郭） 校 明和四年刊 後印	東京都立中央
唐詩選七卷 明 李攀龍編	服部元喬 校 嘉永七年 嵩山房刊	鹿大
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	嘉永二年 南紀帶屋伊兵衞 刊本	二松學舍
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	天保三年 江戸嵩山房小林新兵衞 刊本	新潟県図
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	寛政九年 大阪書肆吉文字屋市兵衞 刊本	市立米沢
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	寛政五年 江戸書肆嵩山房小林新兵衞 刊本	阪大総
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	弘化二年 紀府高市氏青霞堂 刊本	広島大
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	慶應三年 江戸嵩山房小林新兵衞 重刊本	八戸市立
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	慶應三年 東京嵩山房須原屋新兵衞 重刊巾箱本	八戸市立
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	慶應三年 東京嵩山房須原屋新兵衞 重刊巾箱本	八戸市立
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	慶應三年 江戸嵩山房小林新兵衞 刊本	新潟県図
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	文化十四年 江戸嵩山房小林新兵衞 刊本	京産大
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	文化十年 江戸書肆嵩山房小林新兵衞 刊本	阪大総
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	文化十年 江戸嵩山房小林新兵衞 刊本	八戸市立
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	文化四年 江戸嵩山房小林新兵衞 重刊巾箱本	八戸市立
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	文化四年 江戸嵩山房小林新兵衞 刊巾箱本	八戸市立
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	服部元喬校 寛政九年江戸黌山房小林新兵衞 重刻巾箱本	飯田市立中央
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	服部元喬 校 弘化二年紀府高市氏 重刻本	飯田市立中央
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	服部元喬 校 嘉永七年 江戸嵩山房小林新兵衞 刊巾箱本	宮城県図
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	服部元喬 校 嘉永七年 江戸嵩山房 刊本	八戸市立
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	服部元喬校 天保十四年 江戸嵩山房須原屋新兵衞等刊本	千葉縣立中央
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	服部元喬 校 天保十四年 江戸須原屋新兵衞等重刊本	神戸市立中央
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	服部元喬 校 寛政五年 江戸嵩山房小林新兵衞 刊本 後印	新潟県図
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	服部元喬校 寛政十二年 江戸嵩山房小林新兵衞 刊 平假名旁訓本	宮城県図

唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	服部元喬 校 文化十年 江戸小林新兵衞 刊本	高知大
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	服部元喬 校 文化十年 刊本 江戸嵩山房小林新兵衞 印	新潟県図
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	服部元喬 校 文化四年 江戸小林新兵衞 刊本	東洋文庫
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	服部元喬 校 明和四年 江戸嵩山房小林新兵衞 刊本	滋賀大 教育
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	服部元喬 校 明和四年 江戸嵩山房小林新兵衞 刊本	宮城県図
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	服部元喬 校 萬延二年 江戸小林新兵衞 重刊本	京産大
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	服部元喬 考訂 安政二年 江戸書肆嵩山房 刊本	大垣市立
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	服部元喬 點 享和二年 江戸嵩山房小林新兵衞 刊巾箱本	八戸市立
唐詩選七卷 明 李攀龍 輯	服部南郭 考訂 慶應三年 東京書肆嵩山房 重刊本	阪大総
唐詩選七卷 明李攀龍(編)	服部元喬(南郭)(校) 天保十四年江戸嵩山房須原屋新兵衞刊本	立命館大學
唐詩選七卷 明李攀龍(編)	服部元喬(南郭)(校) 河島氏章(校) 岩崎惟武(校) 弘化二年 紀府・青霞堂帶屋高市伊兵衞 刊本	立命館大學
唐詩選七卷 明李樊龍 編	服部元喬 考訂 江戸 書肆嵩山房 刊 文化十年再刻本	蓬左文庫
唐詩選七卷 明李華龍 輯	服部元喬 校 寶暦三年江戸黌山房 刻巾箱本	飯田市立中央
唐詩選七卷 明李華龍 輯	服部元喬 校 寶暦十一年 江戸嵩山房 刻本	飯田市立中央
唐詩選七卷 明李華龍 輯	服部元喬 校 明和四年江戸嵩山房小林新兵衞 刻本	飯田市立中央
唐詩選七卷 卽李于鱗・唐詩選(見返)明李攀龍(編)	服部元喬(南郭)(校) 萬延二年 江戸嵩山房小林新兵衞 刊本	立命館大學
唐詩選七卷 舊本題明李攀龍輯	享和元年 江戸嵩山房 小林新兵衞 刻本	實踐女子
唐詩選七卷 舊本題明李攀龍輯	天保三年 江戸嵩山房小林新兵衞刊 片假名傍訓本	東大総
唐詩選七卷 舊本題明李攀龍輯	寛政十二年 江戸嵩山房小林新兵衞 刊平假名傍訓本	東北福大

唐詩選七卷 舊本題明李攀龍輯	服部元喬 校 慶應三年 江戸嵩山房須原屋新兵衛 重刊本	東大総
唐詩選七卷 舊本題明李攀龍輯	服部元喬 校 文政十三年 江戸嵩山房小林新兵衛 重刊本	東大総
唐詩選七卷 舊本題明李攀龍輯	服部元喬（南郭）校 文政十三年　江戸嵩山房小林新兵衛 重刻本	中央大
唐詩選七卷 題明李攀龍編	〔服部元喬〕 校 享和元年 江戸嵩山房小林新兵衛 刊 後印	公益財団法人三康文化研究所附属三康図書館
唐詩選七卷 題明李攀龍編	服〔部〕元喬 校 天保十四年 熊本、校書樓橘屋儀助刊	
唐詩選七卷 題明李攀龍編	服〔部〕元喬 校 文政元年 江戸嵩山房小林新兵衛刊	
唐詩選七卷 題明李攀龍編	服〔部〕元喬（南郭） 校 弘化二年 紀府、高市氏刊	
唐詩選七卷 闕卷第一至第三 明李攀龍輯	服部元喬 校 文久元年 江戸須原屋新兵衛刊本	八戸市立
唐詩選七卷 闕卷第一至第四 明李攀龍輯	服部元喬 校 寛政六年 東都嵩山房 刊本	
唐詩選七卷 闕卷第六第七 明李攀龍輯	文化十年 江戸嵩山房小林新兵衛 刊本	
注：本表は全国漢籍データベース協議会の「全国漢籍データベース」の記載に基本的に依拠した。		

表 1 に見られるように、現在の日本の研究機関等で所蔵される全てが中国から輸入されたものでは無く、日本で模刻などの方法で再版されたものである。

この内、最も古いものが服部元喬、南郭校の享保九年（1724）原刊とされるもので、その後、宝暦三年（1753）、宝暦十一年（1761）。明和四年（1767）、天明四年（1784）、天明七年（1787）、寛政四年（1792）、寛政五年（1793）、寛政六年（1794）、寛政九年（1797）、寛政十二年（1800）、享和元年（1801）、享和二年（1802）、文化元年（1804）、文化四年（1807）、文化十年（1813）、文化十一年（1814）、文化十四年（1817）、文政元年（1818）、文政十三年（1830）、天保二年（1831）、天保三年（1832）、天保六年（1835）、天保十四年（1843）、弘化二年（1845）、嘉永七年（1854）、安政二年（1855）、安政四年（1857）、萬延元年（1860）、萬延二年（1861）、文久元年（1861）、慶應三年（1867）と幕末直前まで刊行されていた。江戸時代を通じてのベストセラーであったことが知られるであろう。

それではどのように日本で再版されるに到ったのであろうか。次節で述べてみたい。

３　日本で再版された『唐詩選』

江戸時代の日本で『唐詩選』を冠した書籍が多く出版されている。『享保以後江戸出版書目』によると、

唐詩選　五言百首　寛延二　板元　八文字屋八左衛門　売出　鱗形屋孫次郎 [12]

唐詩撰　かな付全二冊　五七絶句計　墨付五十四丁

宝暦八年戊寅六月　　板元売出　須原屋新兵衛[13]

唐詩選　再版全一冊　墨付百四十九丁　宝暦十一年五月

板元　小はやし新兵衛　売出　同人[14]

唐詩選　全一冊　一ヨリ三迄　片カナ付墨付五十七丁

宝暦十二　　二股英勝作

板元売出　小林新兵衛[15]

唐詩選　四五巻　全一冊　片かな付　墨付五十丁

宝暦午冬（十二年冬）英勝点

板元小林新兵衛　売出　同人[16]

唐詩選　再板　全一冊　墨付百四十七丁

明和二年酉三月　　板元須原屋新兵衛[17]

唐詩選　半紙本　全部三冊　原本之通　墨付百六十丁

明和四年正月　　板元売出　小林新兵衛[18]

唐詩選　再板全一冊　墨付百四十九丁

明和六年丑九月　　板元　須原屋新兵衛[19]

唐詩選　再板全壱冊　　板元小林新兵衛[20]

唐詩選　唐音付（ママ）墨付三十五丁

安永六年酉仲春　　板元売出　小林新兵衛[21]（この安永六年版は下図参照）

---

[12] 樋口秀雄、朝倉治彦校訂『享保以後江戸出版書目』未刊国文資料別巻一、1962 年 12 月、57 頁

[13] 樋口秀雄、朝倉治彦校訂『享保以後江戸出版書目』117 頁。

[14] 同上書、132 頁。

[15] 同上書、142 頁。

[16] 同上書、144 頁。

[17] 同上書、154 頁。

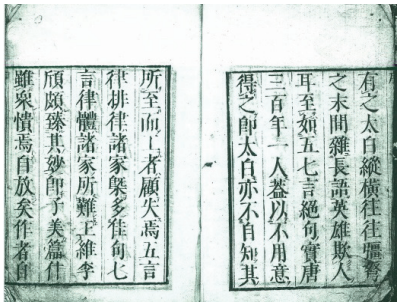
[18] 同上書、161 頁。

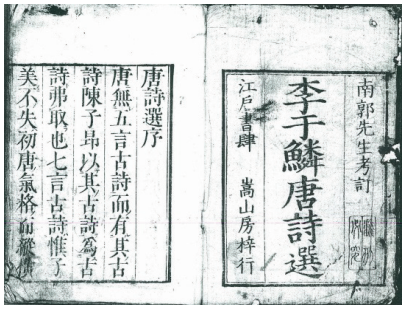
[19] 同上書、179 頁。

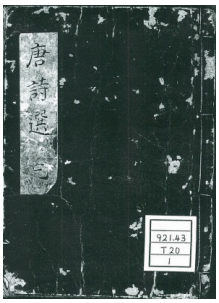
[20] 同上書、211 頁。

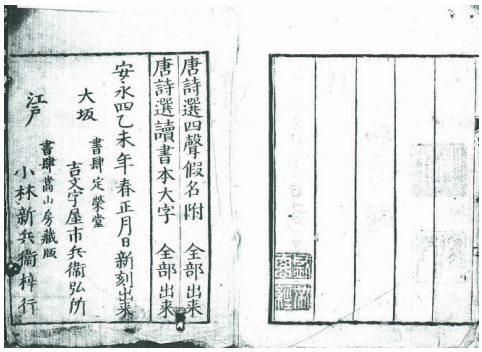
[21] 同上書、227 頁。

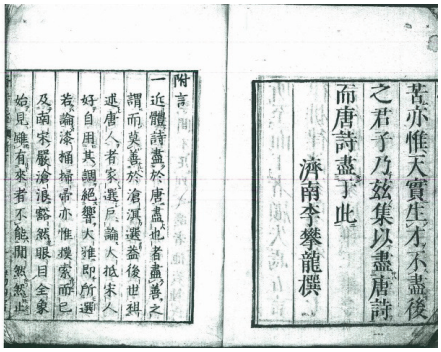
唐詩選　再板　墨付百四十七丁天明二年　　板元売出　小林新兵衛[22]











唐詩選　全三冊　墨付百三十八丁

天明四年辰十一月　赤江先生書

板元売出　小林新兵衛[23]

唐詩選　大字再板　全四冊　墨付四十丁

寛政四壬子夏　　板元　大坂柏原屋加兵衛　売出　山崎道紀[24]

唐詩選　再板全一冊　墨付百四十七丁

寛政五丑春正月　　板元売出　小林新兵衛[25]

唐詩選　小本　全二冊　平かな付　墨付百二十七丁

寛政六三月　　板元願人　小林新兵衛　〆（締）拾品[26]

唐詩選　小本　全三冊　再板　片かな附　墨付百六十二丁

寛政八辰春　　板元原人　小林新兵衛[27]

唐詩選　小本全一冊　再板　墨付百四拾八丁

---

[22] 同上書、246 頁。

[23] 同上書、257 頁。

[24] 同上書、291 頁。

[25] 同上書、294 頁。

[26] 同上書、299 頁。

[27] 同上書、308 頁。

寛政九年巳十二月　板元売出　小林新兵衛[28]

唐詩選　平かな付　全弐冊　墨付百三十七丁

寛政十二年秋　板元売出　小林新兵衛[29]

唐詩選　再板　全三冊　片カナ付　墨付百五十八丁

外ニ奥附トヒラ二丁

享和元酉夏　板元売出　小林新兵衛[30]

唐詩選　小本　全壱冊　墨付百四十七丁

享和二年三月　板元売出　小林新兵衛[31]

唐詩選　再板　全壱冊　墨付三十七丁

文化四年十二月　板元売出　小林新兵衛[32]

唐詩選　全一冊　墨付百五十九丁

文化五年辰三月　篠弼撰

板元売出　小林新兵衛[33]

唐詩選　小本全一冊　再板　墨付百四十五丁

文化九年十二月　板元売出　小林新兵衛[34]

享保以後の寛延二年（1749）から文化九年（1812）までの64年間に、江戸で出版された『唐詩選』は24部を数える。2年半ほどで次から次へと版を重ねていたことになる。

さらに大坂で刊行された唐詩選関係の書籍は次のものである。

唐詩選題引　一冊

作者　臼杵　輝光　（白髪町）

板元　和泉屋次郎兵衛　（長堀白髪町）

出願　明和七年四月　許可　明和七年五月十三日[35]

唐詩選字引　再刻板行申出

板元　鹽屋季助

右板元よりの申出でを本屋行司にて聞届け板行

---

[28] 同上書、320頁。

[29] 同上書、341頁。

[30] 同上書、345頁。

[31] 同上書、348頁。

[32] 同上書、380頁。

[33] 同上書、385頁。

[34] 同上書、420頁。

[35] 大阪圖書出版業組合編『享保以後大阪出版書籍目録』大阪圖書出版業組合、1936年5月、84頁。

申出　文政八年五月[36]

大坂で出版されたものは『唐詩選』そのものでは無く「題引」や「字引」であった。そこで、江戸で再版された『唐詩選』の状況を整理すると次の表になるであろう。

表 2　江戸時代における『唐詩選』の出版状況

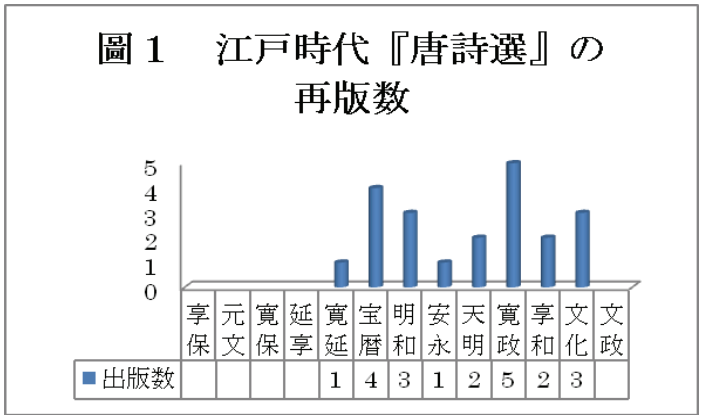
唐詩選	西暦	刊行年	版元
唐詩選	1749	寛延二	八文字屋八左衛門
唐詩撰	1758	宝暦八年戊寅六月	須原屋新兵衛
唐詩選	1761	宝暦十一年五月	小はやし新兵衛
唐詩選	1762	宝暦十二	小林新兵衛
唐詩選	1762	宝暦十二年冬	小林新兵衛
唐詩選	1765	明和二年酉三月	須原屋新兵衛
唐詩選	1767	明和四年正月	小林新兵衛
唐詩選	1760	明和六年丑九月	須原屋新兵衛
唐詩選	1777	安永六年酉仲春	小林新兵衛
唐詩選	1782	天明二年	小林新兵衛
唐詩選	1784	天明四年辰十一月	小林新兵衛
唐詩選	1792	寛政四壬子夏	大坂柏原屋加兵衛
唐詩選	1793	寛政五丑春正月	小林新兵衛
唐詩選	1794	寛政六三月	小林新兵衛
唐詩選	1796	寛政八辰春	小林新兵衛
唐詩選	1797	寛政九年巳十二月	小林新兵衛
唐詩選	1800	寛政十二年秋	小林新兵衛
唐詩選	1801	享和元酉夏	小林新兵衛
唐詩選	1802	享和二年三月	小林新兵衛
唐詩選	1807	文化四年十二月	小林新兵衛
唐詩選	1808	文化五年辰三月	小林新兵衛
唐詩選	1812	文化九年十二月	小林新兵衛

この表を年号別に図式してみると圖 1 のようになるであろう。宝暦年間（1751-1763）と寛政年間（1789-1800）の時期が最も多いことがわかる。この時期がある意味、『唐詩選』が日本で流行した時期であったと考えられる。とりわけ多種類の『唐詩選』を出版したのが、小林新兵衛

[36] 同書、241 頁。

であった。小林新兵衛は、嵩山房の屋号で出版業に従事し、『唐詩選』の販売量が多かったことで江戸時代から明治まで続いた老舗であった。[37]

江戸時代における唐詩の流行の一端は、唐詩に関する多くの書籍が出版されたことでも知られる。江戸書林、本石町十軒店の英平吉の文化七年（1810）頃の「萬笈堂新鐫發行詩集類畧目」によれば、「晩唐詩選」全四冊、「中唐十家絶句」全二冊、「中唐二十家絶句」全三冊、「晩唐十家絶句」全二冊、「晩唐十二家絶句」全二冊、「晩唐二十家絶句」全二冊などが見える。これらの唐詩に関する書籍が出版された背景として、同書目の案内に、



> 凡近体ノ詩、唐ヲ宗トセサルハナシ、然レトモ盛唐ハ高妙ニシテ、タヤスク解シ得ヘキニアラス。故ニ先中唐ノ詩ニ熟シ、後ニ歩ヲ進メテ、盛唐ノ妙ヲモ悟リ、且宋元ノ変遷ヲ知リ得テ、ミツカラ筆ヲ下ストキハ、其本源ヲ失ハス。宋ヲ学ヒ元ニ倣ヒ、或ハ明清ニ擬スルモ各其欲スル所ニ従フヘシ。[38]

と記されている。唐代の玄宗の先天元年（712）から代宗の永泰元年（765）までの約 50 年が唐詩の黄金期とされる盛唐時期の唐詩は、「高妙」で、初心者には理解が難しいため、中唐、晩唐の詩を理解した上で、盛唐の詩を学ぶようにとの簡単ではあるが、唐詩を学ぶ人々への指南を記している。

『唐詩選画本』寛政 2 年（1790）
（国立国会図書館所蔵本）

---

[37] 有本大輔「『唐詩選画本』について―葛飾北斎と高井蘭山の起用」、『アジア遊学』No.116、2008 年 11 月、111-112（110-119）頁。

[38] 『香奩集』巻末の「萬笈堂新鐫發行詩集類畧目」1 丁裏。跋文に「文化庚午十二月廿八日新潟巻大任書于江戸日本橋南平松坊寓居」とあることから、文化七年（1810）十二頃の出版と思われる。巻大任とは巻菱湖（まきりょうこ）として知られる江戸後期の書家で新潟出身であった。大任は巻菱湖の本名である。

このように、江戸時代には多くの人々が、唐詩に強い関心をもっていたその唐詩を学ぶために「寸珍懐中本」[39]と言う手短な書籍も出版され、「會集席、旅行、遊歴ノ重宝トス」[40]とされる程に、会合の席にも旅行に、遊歴に携えて行ける掌中版による「唐詩」関係の書籍が出版されていたことが知られる。

このような江戸時代における「唐詩」流行の要因の一つが『唐詩選』関係の多くの書籍の出版となったことは想像に難くない。

『画入譯解唐詩選』明治 14 年（1881）大阪府立中之島図書館蔵

さらに『唐詩選』は江戸時代の日本で広く読まれたようで、さらに挿絵を加えて出版された『唐詩選画本』なども流布している。[41]

明治以降も『唐詩選』は、日本人の好きな書籍として知られ、画像入りの『画入譯解唐詩選』明治 14 年（1881）出版の存在が知られる。[42]

4　小結

崇禎元年（寛永五、1628）に出版されたとされる『唐詩選』であるが、五言古詩 14 首、七言古詩 32 首、五言律詩 67 首、五言排律 40 首、七言律詩 73 首、五言絶句 74 首、七言絶句 165 首の計 465 首を収録しており、日本に輸入されたことが確認できる最初の『唐詩選』は、享保二十年（1735）十一月　二十番廣東船である。おそらく、これが日本での原本となって、その後、模刻、再版版が作成され唐詩の選集として江戸時代には広く読まれていたのであろう。

その証拠と言えるのが、早くも寛延二（1749）には日本での和刻本が出版され、その後宝暦年間（1751-1763）から寛政年間（1789-1800）にかけてかなりの部数が出版されたことが知られる。

---

[39] 同書、「萬笈堂新鐫發行詩集類畧目」1 丁表「晩唐詩選」の説明文中。

[40] 同書、「萬笈堂新鐫發行詩集類畧目」1 丁表「晩唐詩選」の説明文中。

[41] 有本大輔「『唐詩選画本』について―葛飾北斎と高井蘭山の起用」、『アジア遊学』No.116、2008 年 11 月、110-119 頁。

[42] 大阪府立中之島図書館、図書番号 237.1：202

その傾向は明治時代になっても見られたのである。このため現在でもその和刻本の多くが日本の研究機関等に所蔵されていることで証明できるであろう。